

<資料>

教職相談活動報告

小椋孝昭

はじめに

教職相談室を開設して4年目を迎えた。教職相談室の開設案内は、教職の授業(必修)「人間と教育～教職入門」等で行っているが、来談者は例年10人程度である。一方、教員採用試験に向けての「集団面接」の指導依頼は年々増加し、今年度は21人であった。以下に、その概要を報告する。

1. 教職相談

来談者の相談内容は、全体で15人であったが、大多数(9人)が教員採用試験に関する内容であった。他の相談内容は、①教職に向いているか(3人)、②教員になるために今何をしなければいけないか(2人)、③各県の教員採用試験の状況を知りたい(1人)であった。

学年別では、2年次生(2人)、3年次生(2人)、4年次生(9人)、院生(2人)で、4年次生が大多数を占めていた。

学部別では、地域学部が12人、工学部2人、農学部1人であった。

2. 教員採用試験に向けての「集団面接」

多くの学生は、集団面接についてのイメージがつかめず、不安を感じている。就職支援課でも面接指導が実施されているが、教員採用試験については「教職相談室」に来る学生が大半である。今年は20人が面接練習に参加した。学部は全員が地域学部の学生であった。

面接練習は、実質6月から始めた。方法としては、20人を小学校希望者(15人)と、中学校希望者(5人)に分け、更に小学校希望者を1次試験から「集団面接」のあるグループ(9人)、2次試験から「集団面接」のあるグループ(6人)に分けた。各グループとも、採用試験(1次試験)が始まる前の6月～7月に6回実施し、1次試験合格者対象に2次試験対策として8月～9月に6回実施した。述べ実施回数は30回、参加人数は164人であった。

(1) 「集団面接」指導の実際

<第1回>過去の「集団面接」のテーマ(4県一鳥取・岡山・石川・神戸市)と各県の「求める教師像」についての情報提供と解説。

<第2回>「求める教師像」に対して、自分の体験から話ができる材料を考える

<第3回～第10回>学生が選んだテーマについて、集団面接を実施

(2) 指導の留意点

- ① 面接は、正解を答えることではなく、自分の体験を通して学んだり、考えたりしたことについて話すことが大切であること
- ② 他の人の意見をしっかり聞き、その中からヒントを得て話をつなげること
- ③ 聞く姿勢が大切であること

(3) 学生の反応

最初は、与えられたテーマに対し性急に正解を求めようとし、討論にならなかった。しかし、集団の中で「討論を深めていくことの大切さ」に気づいてからは、他の人の発言に対し質問したり、相づちを打ったり、話題を転換したりと、討論の基礎が身につき、自信となっていた。

小椋孝昭（教育センター・教職教育部門 特任教員）